

春燈

五月号

5

May 2008



久保田万太郎の句

壁にいま夜の魔ひそめるやもりかな

『冬三日月』昭和二十七年

国際演劇会議に出席するため北欧のオスロへ向かう途上、カルカッタでの作。随行者が居なかつたせいか、魔物のような夜の旅愁と孤独感が潜んでいる句である。決して無気味なやもりを詠んでいるのではない。やもりと言えば、私が役員になっているグアムの平和寺には、ずっと、やもりが棲みついている。戦没者を祀るこの寺は、やもりが英霊を守っているのである。

本多游子

久保田万太郎の句

さびしさは木をつむあそびつもる雪

句集『草の丈』昭和二十七年

長男耕一、明けて四つなりと前書がある。日暮里渡辺町に住む。親子三人水入らずにて、はじめてもちたる世帯なり、とも。長じて耕一氏は「父が家庭人として最も満ち足りた日々を送っていた家」と記す。「さびしさは」と言いながら、子を思う父の温かさ、楽しさ。いとおしさが読む者の心に沁みてくる。孤独といわれた師の人生にもこんな幸福な時があったと知りほつとする。

綱 徳 女

西ヶ原日記

(42)

鈴木榮子

花の兄と呼ばれ白梅凜として
母も吾も三月十日強かりし
謁見の姫のごとくに春苺
春セーター母のテキスト主婦の友
地藏尊のお姿受けて彼岸かな

七色唐辛子一匙おまけ春なれや
春昼や中仙道のとばつくち
受難日近きここ一画の耶蘇の墓
友禪の小裂小ものの春の彩
ややに重き塩大福や花曇り
馬酔木咲き水原家墓地一等地
三人寄れば文殊の智慧の穴子食ぶ

みちくさ

高嶋文清

春めける陰影碌山美術館
旧正の肉焼き神の眼と合へり
帰山式の水行もはや人ならず
恋猫の上目遣ひに口出せず
まんさくの花夕闇を掴みをり
末黒野は地球のころ逃げし跡
辻褄の合はぬ辻あり烏雲に
でたらめの色にはじまる春の画布
春眠や忘れてをりし周りの眼
待ちあぐむ一茶のみちくさ犬ふぐり

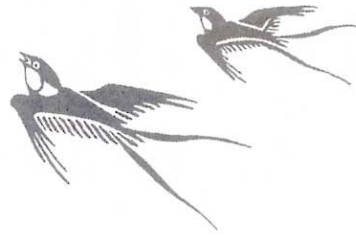
飛驒暮春

石橋公代

春たけなは中山七里北上す
千年の銀杏や芽吹いつせいに
甚五郎の木彫の神馬風光る
はんなりと春日映せり紅春慶
朴葉味噌の香りたたせて飛驒暮春
陣屋宿の太鼓響くや山笑ふ
高山祭からくり人形舞はせけり
合掌造りの屋根の勾配おぼる月
朝市に買ふ一束の干蕨
山国に別れ惜しむや揚雲雀

当 月 集

鈴木 榮子選



○ 神山志堂

白樺の樹皮はためける余寒かな

万霊のかげろふ重し回向院

次郎吉に善の法名暖かし

門塀に高家のなごり紅椿

春寒や単皮の御用は爺かぎり(宮中納)

○ 松波とよ子

臥龍梅ふふむも苑の主役の座

紅梅の枝垂れの終ひの真の紅

妖精のいろか地にはもいぬふぐり

磴のぼるたびうぐひすの右ひだり

竹の秋光陰吾れの経し日かな

○ 塚本みのる

如月の友禅流し水の綾

穴を出し蛇見送らむ村わつば

法事また阿鼻叫喚の浅蜷塚

葺替のはけの祠や鳥よぎる

花と咲く頃合ひ量る蕾かな

○ 久本久美子

出羽海井筒春日野水温む

両国や春風連れて大銀杏

義賊とて受験子集む墓前かな

買へさうな伊万里豆皿春きざす

春時雨江戸の名残のももんじ屋

春燈の句

鈴木 榮子選

迎へられし真砂女の遺影朧の灯（卯波）

愛知 植竹 惇江

竹塀の紐のゆるびや白椿

世の常と心宥むる兼好忌

鱈子買ふ裏のシールの生産地

一つありて数のふえゆく土筆かな

野に摘みし露ほろにがき夫婦かな

廃船の水漬く入江や春の雪

信濃路の旅の朝立ち忘れ霜

春雪や雷門に人を待つ

ワイシャツの夫の衿元春きざす

隠れ耶蘇の悲話語り継ぐ芹の里

妓王忌や雨跡著き白椿

老いを打つ確定申告寒もどる

東京 馬場 宏一

黄砂あび杉花粉あび二月尽

妻逝きてバレンタインの日を忘れ

熱々の白魚鍋や雨となる

二月かの「兵に告ぐ」てふ語り草

紀元節唱歌おのづと口ずさみ

六根清浄富士は青天二月尽

月々参ず牧水墓所の梅見かな（沼津）

おみくじも花も咲かせし梅古木

揚雲雀富士も筑波も視野に入れ

啓蟄やほのかに兆す旅心

旅立ちの挨拶交し帰る鴨

海猫を引き連れ帰る蜆舟

ジャンパーの焦げ跡左義長帰りかな

静岡 徳永 辰雄

千葉 島田 山流

三重 上野 進



余言

鈴木 榮子

出羽海井筒春日野水温む

春時雨江戸の名残のももんじ屋

久本久美子

〃

掲句は名門部屋を三つ重ね、その華のある固有名詞を受けて「水温む」と下五をおさめたことは成功でしょう。「ももんじ屋」は両国橋を渡って千葉街道に入る右角の店で、昔は通りに面した外に猪が一、二頭吊るされておりました。

佐保姫のうす目開けたるほどの春

中島 昌子

佐保姫は春を司る神で竜田姫は秋を司る神。佐保姫がうす目を開けた—とは大胆な発想、おもい付きです。神様の

うす目を開けた程という譬喩は中々ユーモアのある譬です。そんなぼんやりした長閑な春なのです。

鶯餅どこより口に入れようか

西岡 啓子

街の雨鶯餅がもう出たか

富安 風生

風生先生の「鶯餅—のお句は有名でその季節になると必ず思い出します。何気なくて温くて好きな句です。

掲句はその鶯餅の「—どこをどう抓もうか—」ということも納得できます。黄粉がこぼれること、柔かくしつとりした和菓子の子の代表のような鶯餅をよく捉えています。

(以下略)

